



「下村満子の生き方塾」

ニュース Vol.08 2017.01



資本主義の未来を考える

「下村満子の生き方塾」は11月19日、東京・高田馬場のIZUNOME TOKYOで11月勉強会を開きました。10分間坐禅に続いて、塾生五訓を唱和し、千田利雄塾生がディスカッションリーダーとなって、稲盛和夫著「生き方」の輪読会を進めました。午後から「資本主義の未来」と題したNHK特集の第一部「世界の成長は続くのか?」のDVDを、林田宗士塾生の操作で見た後、下村塾長が最新の経済の動きについて講話しました。応援団講義は日本を代表する照明デザイナー石井幹子さんが「光は時空を超える」と題して行いました。石井先生の講演内容は次号で詳報します。(文責・皆川猛)

輪読会

●魂を磨こう

前回に引き続いて稲盛和夫塾長の著書「生き方」のプロローグを、千田利雄塾生がディスカッションリーダーとなって、輪読会を進めました。

千田塾生はそれぞれの節のキーワードを、次のように抜粋しました。

①混迷の時代だからこそ「生き方」が問われる。

多くの人が生きる意味や価値を見いだせないため、人生の指針を失ってしまった。豊かなはずなのに心は満たされず、礼節に乏しい。自由なはずなのに閉そく感がある。こういった時代だからこそ、一番必要なことは、「人間は何のために生きるのか」という根本的な問いかけである。生きる指針としての「哲学」を確立することが必要だ。

②魂を磨いていくことが、この世を生きる意味。

俗世間に生き、さまざまな苦楽を味わい、幸不幸の波に洗われながらも、死ぬまで一生懸命に生きる。その過程そのものが磨き砂として、人間性を高め、精神を修養し、生まれた時よりも高い次元の魂を持ってこの世を去る。それが人間が生きる目的であり、価値である。つまり現世とは「心を高めるために与えられた期間」であり、「魂を磨くための修練の場」である。

③単純な原理原則が揺るぎない指針となる。

魂は「生き方」次第で磨かれもすれば曇りもする。人生をどう生きるかで、心は気高くもなれば卑しくもなる。才覚が並はずれたものなら、それを正しい方向に導く羅針盤が必要で、それは理念、思想、哲学であるが、何も難しいものではない。それは「人間として正しいかどうか」ということで、嘘をついてはいけない、人に迷惑をかけてはいけない、正直であれ、などと言った子どもの頃、親や先生から教わった単純な規範である。これを生きる上で最も大切なことだと言い聞かせて、稲盛さんは生きてきた。

④人生の真理は懸命に働くことで体得できる。

お釈迦様は悟りの境地に達する修行法の一つとして「精進」することの大切さを説いている。精進とは目の前の仕事に脇目も振らずに打ち込むこと。それが心を高め、人格を錬磨す

るために一番有効な方法だ。労働には、欲望に打ち勝ち、心を磨き、人間性をつくっていく効果がある。自分がなすべき仕事に没頭し、工夫をこらし、努力を重ねていく。それは与えられた今日という一日、今という一瞬を大切に生きていくことにつながる。労働は経済的価値を生み出すのみならず、まさに人間としての価値をも高めてくれるものである。

⑤「考え方」を変えれば人生は180度変わる。

人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力。人生や仕事の成果は、これら3つの要素の「掛け算」によって得られるものであり、決して「足し算」ではない。能力は先天的な資質を意味し、熱意は事をなそうとする情熱や努力する心で、自分の意思でコントロールできる後天的な要素で零点から100点までである。3要素で一番大事なものは「考え方」で、考え方次第で人生は決まってしまう。考え方とは心の在り方や生きる姿勢であって、哲学、理念、思想なども含む。考え方が大事な理由は、マイナスポイントがあるからで、プラス100点からマイナス100点までと幅が広い。掛け算だから、考え方が間違っていれば、ネガティブな成果しか出ない。「よい心」とは、常に前向きで建設的であること。感謝の心を持ち、協調性を有していること。明るく肯定的であること。善意に満ち、思いやりがあり、やさしい心を持ち、努力を惜しまない。足るを知り、利己的でなく強欲でないこと。極めて当たり前のことだが、頭で理解するだけでなく、体の奥までしみ込ませ、血肉化しなくてはいけない。

⑥心に描いたものが実現するとい宇宙の法則。

仏教には「思念が業をつくる」という教えがある。思ったことが原因となり、その結果が現実になって表れてくる。人生は心に描いた通りになる、強く思ったことが現実となって現れてくる——この「宇宙の法則」を心に刻みつける。良い思いを描く人には、よい人生が開けてくる。悪い思いを持っていけば、人生はうまくいかなくなる。「よかれかし」という利他の心、愛の心を持ち、努力していけば、宇宙の流れに乗っ



「生き方」のプロローグを読んだ輪読会

て、素晴らしい人生を送ることができる。

⑦人類に叡智をもたらすつづける「知恵の蔵」がある。

必死になって研究に打ち込んでいる時、叡智の一端に触れることで、創造性を発揮して成功の果実を得られる。知恵の蔵の戸を開け知恵を得るには、燃えるような情熱を傾け、真摯に努力するしかない。よい思いを抱き、一生懸命頑張っている人に、神は行く先を照らす松明を与えるように、知恵の蔵から一筋の光明を授けてくれる。

⑧自己を厳しく律しつづける「王道」の生き方をせよ。

人間は進むべき方向を見失っているのではないか。知恵の蔵から与えられた知恵の使い方を誤り、間違った方向に歩み始めているのではないか。この元凶は生きていく上での「哲学」を見失ったことにある。人間として正しい生き方、あるべき姿を追究することは、地球を破壊への道から救い出すことになる。一人ひとりが自分の「生き方」をいま一度見直す必要がある。



〈この提起に対して塾生からは〉

◎東日本大震災までは生き方を考えたことはなかったが、自

分は生かされているのだ、と考えるようになった。生かされているのだから、恥ずかしい生き方はできない、と思うようになった。

◎魂という概念はなかったが、最近ようやく魂を磨くという意味が分かるようになった。人は死ぬば忘れ去られるが、魂を磨き他人のために尽せば、人々の印象にずっと残る。人間は利己を実現したら、次は利他を目的に生きるべきだ。

◎自分は自分が見えない。自分が分からない。だからこそ、「人として何が正しいのか」という判断基準がある。

◎人として正しいことをする判断基準は単純な原理原則で、いざ実践すると、言い訳が利かないから疲れてしまう。だから、これとは逆のことをやられると、我慢できなくなって仕方がない。

◎未知の世界、出来事と遭遇した際、新しいことを知るの喜びであると、プラスと受け入れられれば万事OKだ。要は考え方一つだ。

◎人間として正しいことをひたすら実践していると、周りから見ればつまらない人間と見える。しかし、それこそが本当の生き方なのだと自覚した。

●ポジティブに考える

下村塾長はこうした意見を次のようにまとめました。

「人間は煩惱の固まりであって、迷った時、生きる基軸があるかどうかで、その後の人生は変わる。だます人間になるより、だまされる人間になったほうがいい。ドライ・ラマさんは、『みんな、世の中に悪いことばかり起こっている、と言うけれども、目には見えにくい、いいこともたくさん起きている。ネガティブに考えないで、ポジティブなことに目を向ける。そうすると、自分にもいいことが起きてくる。世界は、大

統領や総理大臣のようなリーダーではなく、電無名の人たちの善行によって保たれている』とおっしゃっています。大宇宙には世界をいい方向に持っていこうという意思があります。そこから発信されるメッセージを受け止めるには、磨かれた魂、魂を磨こうとする行いが必要だ。そのためには日々、普段の小さな小さな努力でもいいので、一步一步前向きに生きましょう。」

塾長講話

●卒論と同じになった

今期の開塾式では「資本主義の終焉と歴史の危機」を出版した水野和夫さんをお呼びして講演をしていただき、現代資本主義をテーマにしたシンポジウムを開きましたね。なぜそれをテーマにしたかということ、今世界は大きな激動期に突入し、これまでの常識、我々が立っている土台石が大きく揺らぎ、この先どうなっていくのか、予測がつかない時代に入っているからです。資本主義は実体経済から離れた金融資本主義に変質し、社会の格差は広がる一方です。

私の卒論テーマは「経済政策にむける価値判断の問題」でした。経済政策の目的は、人々を豊かにすることにありますが、何を価値判断の基準にするかということです。当時の経済学はマルクス経済学が全盛でした。同じように「社会主義」を提唱していたもう一つの流れは、キリスト教をベースにした今の北欧諸国やイギリス労働党、フランスの社会党などが、西欧で支持されたフェビアン社会主義がありました。

私はマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」から大きなヒントを得ました。この論文の中で、ウェーバーは、西洋近代の資本主義を発展させた原動力は、主としてカルヴィニズムにおける宗教倫理から産み出された

世俗内禁欲と生活合理化であるとした。この論文は、マルクス主義の「宗教は上部構造であって、下部構造である経済に規定される」という唯物論への反証としての意義があった、と思います。さらに産業革命が始まった18世紀後半にイギリスの経済学者アダム・スミスが書いた「国富論」も参考にしました。彼は「経済は、政府が口を出さずに人々の自由にまかせておけば、自然ぶ最良の均衡点に落ち着く」という考えで、これが資本主義の大前提になっています。

これらを基にした私の結論は、マル経の基本は唯物論(物質が全て、という考え方)から駄目、キリスト教をベースにしたフェビアン社会主義も納得できない、仏教的人間観、価値観に基づく経済政策こそが正しいと主張しました。資本主義は自由放任レッセフェールですから競争はつきもので、それが発展のエンジンになっています。競争だけにまかせると弱肉強食になり、その結果が今の状態です。しかし仏教的な「貪欲にならない」「足るを知る」「利己ではなく利他」といったような価値観が根底にないと駄目だと書き、マル経全盛



大富豪、トランプ次期米大統領
所有の高層ビル

時代にもかかわらず、人間、人間の本質を否定する社会主義経済は必ず崩壊するとも書きました。実際、アメリカ留学を終え、世界一周の帰国の旅の途上、モスクワのデパートに立ち寄った際、商品がほとんどない光景を目にして、この国はやがて潰れると思い、実際そうになりました。

では、資本主義が勝利したかといえば、決してそうではありません。ほんの数パーセントの人たちが世界の富の半分以上も独占する巨大格差社会をもたらしました。今日は、2016年10月16日から日曜日の夜3回にわたり放送されたNHKスペシャル「資本主義の未来」の第一話『世界の成長は続くのか』を先ず見ていただきたいと思います。それによると、トップ62人ほどの世界の大金持ちが、世界総人口の半分にあたる下層36億人の所得合計と同じ資産を持っています。かつては総中産階級といわれた日本も、格差社会となっ

てきており、この両極分解は世界中で進んでいます。

イギリスのEU離脱は、格差の進行に対する不満のはけ口であり、アメリカ大統領選でのトランプの勝利も同じく不満のはけ口です。トランプにとっての政治は、得か損しかありません。労働者を搾取して富を築いた人が、当選したのは、実に皮肉ですが、メディアもトランプの嘘を批判しません。社会主義学者と自称して、ヒラリーと予備選を戦ったサンダースが予想に反して善戦したのも、不満いっぱい若者が支持したからです。かつて、アメリカでは、社会主義者と言っただけで、テロリストだったのに。こうした結果をみると、経済成長とは何のために、誰のためにあるのか、と言いたくなります。

NHKスペシャルは「資本主義の未来」という大テーマの下、①世界の成長は続くのか②国家VS超巨大企業③巨大格差の果てに、の3部で構成されています。では早速DVDを見ましょう。

DVD上映

●62人の資産が36億人の資産と同額

米大統領選挙を左右する大富豪とホームレスの「巨大格差」。2500億円の詐欺事件の首謀者が語る「大企業の不正」の内幕…。世界中で相次ぐ“お金”をめぐる大異変に、爆笑問題の二人が分かりやすく切り込むいま「マイナス金利」「モノを買わない若者」など、日本でも異変が。それは250年続いてきた経済成長の終わりではないか？今後も世界は成長を続けるのか？資本主義のスケールで現代を読み解く新シリーズ。《シリーズ マネー・ワールド 資本主義の未来 第1部 世界の成長は続くのか》

・巨万の富を握るアメリカの億万長者たち。総資産2300億円のある男性は、金の力でアメリカ大統領選挙を動かそうとしていた。大富豪たちは秘密会合を重ね、巨額の献金で国家の行く末を左右している。その裏で増え続ける貧困層。世界

●長期停滞の始まり

・資本主義発祥の地イギリス。240年前、一人の男の理論が世界を成長へと駆り立てた。アダム・スミス(1723～1790年)は、人類が欲望のまま活動すれば、見えざる手が社会を繁栄に導くといった(「国富論」1776年)。スミスの予言通り、240年にわたって続いてきた経済成長。ところがその出発点の国イギリスが今、大変な事態に。深刻な問題として専門家が注目しているのが、ヤングホームレス(16～25歳)。仕事も家もない若者が去年8万人を突破した。

・実は資本主義の視点で見ると、このヤングホームレスの増加は、大問題だと言われている。これまで主に中高年が借金やリストラなどで陥ってきたホームレス。ところがヤングホームレスは、若い労働力が就職できないなどで陥る状態。経済成長の出発点が崩壊し始めていることを意味している。

・高等教育や特別な資格も就職に繋がらず、事態を悪化させている。ロンドンに住むナディア・カービアさん、大学卒業後、ソーシャルワーカーの資格を生かせず、働き口が全く見つからないという。カービアさんは「去年こそ仕事に就きたいと願っていたのですが、何度面接を受けても就職できませ

36億人の総資産が富裕層のトップ62人と同じという異例の格差が広がっている。



総資産2300億円の大富豪

・国家を上回る富の力で市場に君臨するグローバル企業。南米では巨大企業に訴えられ、追い詰められる国も出ている。
・ヨーロッパに拡大する深刻な失業率、見えない将来への不安と怒りが渦巻いている。

これらの異変は、人類の繁栄の終わりの始まりを告げているのではないか。知の巨人たちは今、一斉に警鐘を鳴らしている。人々に富をもたらし、世界を成長へと導いてきた資本主義。相次ぐ異変は何を示しているのか、そして私たちがどこへ連れて行こうとしているのか。

んでした。病気の母の世話もあるので経済的に苦しくなり、本当につらい状況です」と苦しい胸の内を打ち明ける。

・今、イギリスの産業全体にも厳しい観測が広がっている。製造業や貿易など幅広い業種で成長が低迷。今年のEU離脱の決断には、こうした経済停滞が背景にあったと指摘されている。シンクタンク代表のラウル・ルパレル氏は「イギリスの歴史を考えると、こんな事態に陥ったことに誰もが驚いています。まるで資本主義がもう役目を終えてしまったかのようです」と発言する。

・これは単なる不況ではなく、資本主義の根幹に関わる異変ではないか。専門家がそう懸念するのは、問題がイギリスだけに留まらないからだ。世界の経済成長を表したデータを見ると、時々停滞しながら成長を続けてきた世界。ところが2008年を境に、状況が一変した。あのリーマンショックだ。ヨーロッパの広い範囲で経済がマイナスに転落。日本、韓国も停滞から抜け出せなくなってしまった。

・この状況を、世界が初めて直面する資本主義の危機だと捉える経済学者がいる。アメリカ、クリントン政権の元財務

長官で、経済成長の世界的権威ローレンス・サマーズ教授だ。彼は「これは人類が経済を生み出して以来、一度も経験したことの無い事態です」と言う。

・これまで経済は不況に陥っても、経済政策や景気のサイクルで好景気を取り戻し、全体として徐々に成長に向かってきた。しかし今回は、まるで成長の波が見えない壁にぶつかったかのように一向に上向こうとしないというのだ。さらに賃金の悪化や物価の低迷など、成長に関わるエンジンが次々に止まっていくという深刻な事態が発生。サマーズ教授は、これまでの不況と全く異なる長期停滞という現象だと、指摘する。

サマーズ教授は「金融危機や不況は感染症のようなもので、治療すれば治ります。しかし長期停滞は、いわば慢性的な病気で、どんどん社会を衰弱させていくのです。その結果、投資がなくなっていき、それが若者の失業とスキルの喪失に繋がるという負の連鎖を生み出します。そうなると、社会全体で将来への悲観論が支配的になり、さらに景気が後退していくのです」と指摘する。

・長期停滞が過去の恐慌や景気低迷と異なるのは、これま

●消える“フロンティア”

・なぜ成長は限界だと言うのか。人類の反映の歴史を研究してきたサリー大学のティム・ジャクソン教授は、資本主義の原動力が止まったからだと言及する。それはフロンティアの消失だ。「資本主義が経済規模をどんどん拡大させ、今は満杯の状態になっているのです。まさに限られた箱の中のアリの巣のようなものです」

・ジャクソン教授の言う、フロンティアの消失とはどのようなものか。先進国の経済も、出発点は自国の開拓。しかし産業や資源は限られ、成長はすぐ頭打ちになる。そこで利益の増幅を目指し植民地などのフロンティアへと進出。安い労働力や新たな市場を拡大することで更なる成長へ結びつけていく。さらに20世紀になると、新興国への投資や貿易も開始する。まるでアリの巣を広げるように、より外へより遠くへと成長の源泉を求め、自国の経済規模を膨らませていった先進国。しかしその爆発的な成長も限界が見え始める。

・アメリカの貿易相手の拡大を年ごとに表したデータを見ると、1960年代、アフリカ大陸を中心に72か国にフロンティアを拡大。80年代に入るとミクロネシアの国々とも取引を広げ、急成長を遂げる中国との貿易額も増大していく。しかし2000年を過ぎた頃、地理的フロンティアは世界150か国に行き渡り、それから得られる富も限界に達する。

・地理的フロンティアが限界に達する中、人類が新たに見出したのが金融空間。実体経済ではなく国境を越えた為替取引などで利益を上げる。マネーがマネーを生む錬金術に新たな成長を求めた。90年代以降、株や債権をはじめとした金融資産は急速に拡大。実体経済の3.5倍、206兆ドルに達した。しかしリーマンショックの後、その成長も頭打ちになった。多くの経済学者が、世界にはこれ以上フロンティアが残されていないと指摘するようになった。

・フロンティアの消滅で、世界の経済成長は限界に近づいている。その証拠がある異変に現れていると指摘するのは、経済

での経済対策が思うように効果を見せていないという点。リーマンショックの後、世界各国の財務大臣らとともに景気対策を主導した元イングランド銀行総裁のマービン・キング氏はこのように語る。「8年前、世界の首脳たちは、今のような危機を誰も予想していませんでした。再び成長を取り戻せると考えていました」

・当時キング氏らが解決の切り札として取り組んだのが低金利政策。停滞した経済を活性化させるため、中央銀行が金利を一斉に引き下げた。金利が低ければお金を借りやすくなり、貯金しても利息がつかないので、よりお金を使うようになる。多くのお金を流通させ、経済の活性化を促すという計画だった。

・ところが今回は、極限まで金利を下げても成長が上向かない。資本主義のこれまでの常識が通用しない事態が起きているというのだ。キング氏は「世界はアダム・スミスの『見えざる手』が成長を続けさせてくれると信じてきました。しかし資本主義が安定した世界を保つという物語は、誤りだったことが分かってきたのです。つまり我々は恐ろしく不透明で、何が起きるか分からない世界に生きているということなのです」と発言する。

学者で哲学者でもジャック・アタリ氏だ。彼は「経済における不正や腐敗、犯罪の蔓延などが大きな問題となっています。

公益を守ることを資本主義の基盤である民主主義が見失うと、それは破滅の始まりといえるでしょう」と指摘する。彼が指摘する異変、それは大企業の不正だ。信頼と実績を積み上げてきた世界有数の企業に、かつては考えられなかった事件が相次いでいる。

・なぜ大企業による不正多発が成長の限界を示しているというのか。世界の金融界を揺さぶった巨額不正事件の首謀者の取材から、その一端が浮かび上がった。2011年、ヨーロッパ最大規模の銀行UBS(本社はスイス)の取引で2400億円もの損失を出し逮捕された人物。「ならず者トレーダー」と呼ばれたクウェク・アドボリ氏は、成長が減速した組織で利益を上げるには、不正に手を染めるしかなかった、と語った。「我々の銀行は瀕死の状態になり、生き残れるかどうかの崖っぷちに立たされました。危険な方法でしたが、不正な取引以外、選択肢がなかったのです」と。

・リーマンショックの影響で巨額の損失を出したUBS。投資部門の責任者だったアドボリ氏は、経営を立て直すため、一刻も早い利益の獲得を強く求められていたという。失敗は許されない。大きなプレッシャーの中、アドボリ氏は裏口座の資金を使い、禁じられた高額な取引を繰り返すようになった。彼は「10億ドル損をする危険があっても、1000万ドルの利益を得るためには不正しか方法がなかったのです。上司も気づいていましたが、利益さえ出していれば誰もが満足しました。巨額の利益を上げるには、他に方法がないと分かっていたからです」と振り返る。

・裏口座のからくりが暴かれたとき、損失は2400億円に膨らんでいた。上司たちは関与を否定、アドボリ氏は逮捕され、国外追放を命じられた。彼は「逮捕されてから2カ月、拘留所で初めて考えました。自分は何をしてしまったのかと。フォル

クスワーゲンの不正事件のニュースを見て、自分と同じことが起きていると思いました。会社から厳しい目標が設定された時、それは無理です、とは言えず、不正に踏み切らざるを得なくなってしまったのです」と話す。

・経済システムの暴走など、現代の課題について研究する元米労働長官でカリフォルニア大学のロバート・ライシュ教授。成長が限界に近づく中、資本主義そのものが変質し始めていると警告している。彼はこう語る。「いわばスーパー資本主義ともいべき異質なものが生まれようとしています。より早く、より効率よく、より手ごろなものを過剰なまでに追求するシステムに変貌しているのです。私たち人間は、どれほど社会的良心がある人でさえ、できるかぎり得をしたいと望みます。そして企業は、あらゆる手段を使って競争を生き残ろうとします。行き過ぎた資本主義は、弱肉強食のジャングルのような世界を作り上げているのです」

・世界は革新的なイノベーションで、まだ成長できる。その中で注目を集めているのは人工知能AI。今、AIが金融の世界を

●シェアリング・エコノミーに注目

・もう一つ、世界に革命を起こすとされるイノベーションが今、広がつつある。シェアリング・エコノミーだ。これまでモノを生産し、その所有や消費を促すことで成長を維持してきた資本主義。その構図を根底から覆し、モノを作らず、空間やサービスを共有することで利益を生む、全く新たな経済が生まれつつある。

・今、シェアリング・エコノミーを掲げる新たなベンチャー企業が急成長、莫大な利益を上げている。筆頭に立つのが、新型配車サービス、ウーバー。創業僅か7年で企業価値は7兆円を突破。大手自動車メーカーを超え、北米・ヨーロッパを席捲している。

・もう一つ注目を集める企業がある。今年サッカーの国際大会でその勢いを見せつけた。旅行者と自宅の空き部屋を貸したい人をネットで結ぶ民泊。その最大手エアビー・アンビーだ。市場の拡大を目指しているのが、観光都市パリ。エアビー・アンビーを利用し自宅の空き部屋を貸し始めたグレゴリー・ルセフさん。近隣のホテルより3割程度安い値段で部屋を提供、節約志向が高い旅行者の心を捉えている。グレゴリーさんはこの1年で320万円を手にし、「やはり民泊の収入は助かりますね。大事な収入源です」。

・創業僅か8年で時価総額3兆円を突破したエアビー・アンビー。利用者は今年1億人の大台を超えると見られている。創業者の一人、ジョー・ゲビアCPO。シェアリング・エコノミーがこれからの経済を牽引していく、と強調する。「臨時収入を得たい人や、家に誰か訪問してほしいという現代の高齢者にもマッチしています。20世紀型の古い経済から、より多くの市民が経済の主体となって利益を得ていくという新たな資本主義に移行しているのです」

・一方でイノベーションによる成長は、全ての人に利益をも

●国家を超えた共通ルールを

いかがだったですか。感想を話してください。

◎佐久間広幸塾生…今の流れは、資本主義が駄目になったのではなく、行き過ぎを是正する「振り子の振り戻し」ではな

大きく変えようとしている。投資ファンド・ロテラ社にカメラが入ったのは、実はある特別な日だった。イギリスがEU離脱を決め、世界の株式市場が200兆円以上を失ったとされる日。世界中のトレーダーが損失を出す中、この会社のAIは瞬間的に市場の動きを読み取り、全体で5%以上の利回りを確保。停滞のものともしないパワーを見つけた。「そのうちAIが進化し、1か月先のマーケットの動きまで予測して売買できるようになるでしょう」と、同社のロバート・ロテラ社長は話す。

・資本主義の歴史の中で、世界に劇的な成長をもたらしてきたイノベーション。電気の発明は人々の暮らしや産業そのものを一変、エンジンの開発は社会のスピードを爆発的に加速させた。マクロ経済学的世界的権威でノースウェスタン大学のロバート・ゴードン教授は、人類の英知が生み出す新たなイノベーションこそが、停滞を打ち破るカギだと指摘し、「今、多くの分野でイノベーションが育っています。3DプリンターやAI、ビッグデータ、そして自動運転。生産性が上がり成長は加速するでしょう」と予想する。

たらずわけではない。経済学者ヨーゼフ・シュンペーターが唱えたのは、新たな企業が旧来の企業を駆逐する創造的破壊。経済が停滞した世界に、全く新たな手法のイノベーションが登場する。便利で新しく、より安価なものなどに人気が集まり、古いものは淘汰されていく。しかしすぐに真似する企業が次々と現れ、また利益を上げられなくなっていく。成長のためには、無限の破壊が避けられないというのだ。

・実際に、シェアリング・エコノミーの台頭が今、旧来の企業を大きく揺るがしている。パリ・サンルイ島でホテルを経営するナタリー・エッケルさん。かつて半年先まで予約が一杯だった4つ星ホテルは、宿泊客が激減している。「ヨーロッパ選手権の期間中、予約はあまり入りませんでした」と表情を曇らせる。サッカーの国際大会という繁忙期でも部屋は埋まらず、売上は20%ダウン。エアビー・アンビーにホテルを取り囲まれたナタリーさん。今年、長年勤めた従業員3人の解雇を決めた。シェアリング・エコノミーは、新たな資本主義の幕開けなのか、その行方に注目が集まっている。

・利益を追求し不正事件を起こした元トレーダーのアドボリ氏は「取引中によく、アダム・スミスの『見えざる手』の話をしました。彼の故郷に今、私がいるなんて皮肉ですね。私も『見えざる手』に踊らされたのかもしれませんが。でもそれは世界中の人も同じでしょう」と話す。

・成長への挑戦は続く。上空の巨大ドローンで50億人のネット市場を狙う「フェイスブック」。2020年の宇宙ホテル開業を目指すビゲロー・エアロスペース社。「人類は“新たな成長”を見いだせるか」

【DVD終了】

いのか。行き過ぎた部分を戻そうとするから、現在の資本主義に放送されたような批判が出ていると思う。

◎小口潔子塾生…観光業では海外からの観光客が増えて

きており、関西地方はキャパシティが足りなくなり、民泊が増えている。シェアリング・エコノミーは、日本でも勢いを増している。しかし、歯止めのない民泊は、旅館業を圧迫するから、何とか対策を考えて欲しいと、官庁に言っている。

◎三田公美子塾生…資本主義の大きな変質はグローバリズムのせいだ。このグローバリズムを何とかしないと、格差社会はますます広がり、これまでの暮らしは成り立たなくなる。



貴重な意見ありがとうございます。グローバリズムとローカルリズム。今、経済、物流、人の動き、情報は国境とは無関係に全世界を自由に行き来し、政治だけが国という小さな単位で閉鎖されています。ここに矛盾の要因があります。行き過ぎた資本主義に網を被せようとしても、国境が邪魔し、富裕層、グローバルな巨大企業は税負担の軽い国に富を移します。そこを拠点にしてさらに金儲けをするわけですから、貧富の差は広がる一途です。世界全体を統率できるルール、組織、仕組みが必要なわけです。世界共通のルールを作ればいいのです。今、一番望まれているのは、富の再配分だと思います。富裕層からきちんと税金をもらい、それを原資として貧者に配る。それこそそれが、国や国際的な公的機関の仕事でしょう。

シェアリング・エコノミーですが、先程出てきたウーバーですが、電話一本で、客が待つ場所にやって来る個人タクシーというか白タクというか、とにかく便利なシステムです。最近ニューヨークに行きました。ニューヨークは、特に夜間、タクシーがつかまらない都市ですが、先日言った時は、どこでもすんなりとつかまえることができました。ウーバーを利用する人が増えたため、タクシーは供給過剰になったのです。ウーバーの運転手は、サラリーマンや仕事をもっている人が、でアルバイト感覚でウーバーに登録し、都合のいい時だけドライバーをやるのです。サービスもいい。スマホで配

車を頼めば、後何分後に着きます、運転手はこういう人ですと画像で知らせてくる。安心して利用できるのです。だからシェア



最近のニューヨークでは空車のタクシーも少なくない

リング・エコノミーは、これからの成長モデルです。これとどう折り合いをつけて、共存するかがポイントとなるはずですが。

先程のDVDでは、成長の可能性を論じていましたが、これまでのような物質的な成長はこれ以上望めません。物質的な成長は、まだ使えるモノを廃棄して新たなモノを作る、不要なモノを買わせるなどといった無駄の経済しかありません。これは有限な資源の浪費でしかなく、人間は今、地球という命の源泉である自分の体を食い荒らしているのと同じです。

もはや世界には、物現的、地現的、環境破壊も含めて、成長の余地、フロンティアはなく、これからは物質ではない、目には見えない価値、お金には換算できないものに価値を認める時代になると思います。腹八分目の人が健康であるように、「足るを知る」のライフスタイルがいいのです。勿論、モノが要らないわけではありません。必要な分だけ、持てばいいのです。人のために尽す、つまり利他が充足感を生み、目に見えない価値を体験できるのです。

グローバリズムは1990年代から猛スピードで進行しました。極端な変化でしたから、極端は結果が生まれ、それが極端な格差社会になっています。20世紀は「大きいことはいいことだ」の時代でしたが、21世紀は「小さいことはいいことだ」の時代、価値観の世界です。グローバルに考え、ローカルに考える。身の丈の生活をして、利他に努める。それで十分だと思います。

●塾生の一言感想 「目に見えない価値を再認識」

○…輪読会が始まる前に「生き方」を読んでいたの、色々な人と意見を交換できてよかった。価値には経済的なもののほかに、文化的、社会的、道徳的といった目に見えない価値があることをあらためて認識しました。今後はこれら目に見えない価値を伸ばしていくべきだと思うし、地球資源には限りがあるので、物質主義としての資本主義には限界があると思います。

○…様々な経営指針、経営理念とは異なり、稲盛さんの「人間として正しいこと」というシンプルな判断基準は、いつ聞いても新鮮に感じます。

○…稲盛さんの生きる姿勢は明瞭であり、奥深い。ソウルメイトの生き方塾生とともに学べる喜びを感じる。資本主義が大きな転換にあることを、ウーバーやエアビー&ビーといったシェアリング・エコノミーの台頭によって裏付けられている。グローバルとは、という本質を学べてよかった。

○…世界中で貧富の差が拡大し、この一方ではいろいろなものをシェアする新しい時代が到来しています。この先、どうなるのか、不安に感じています。

○…人間は衣食住が満たされただけでは充足感を得られない「生き物」。生きる意味を考え直すいい機会です。技術革新、AIの活用によって生産性が上がり、成長が拡大するのは分かりますが、その先には何があるのか、と疑問を感じます。急速な変化の中で、ヒトの体の仕組みや、子どもの成長の仕組みは何千年も基本的に変わっていない状況で、社会の激変がどのような影響を与えるのか、とても心配です。

○…世界の62人の資産が、36億人の資産と同じだというのは、やはり正しくないと思います。今こそ資本主義の変革の時だと知り、成長は物質ではなく、人間の心の成長が望まれているのではないかと、思いました。地球資源は有限であり、それを私たちの世代で浪費していいはずはありません。まさに「足るを知る」です。

○…「生き方塾」で学んだことを実践しようと思ひ、毎日10分間の坐禅を努めています。稲盛さんが言うように「人一倍厳しい生き方を自分に課し、自分を律する」。学びを血肉化することが大事だと考えています。

○…これからは成長が見込めない世界。「シェアリング・エコノミー」に新たな可能性を感じました。

○…DVDでは、資本主義が大きな転換期に直面している、と強調していましたが、自分もそう思っています。そこで必要なことは、価値観を変えるということです。自分も物質ばかりでなく、目に見えないものにも注意、関心を払わなくては、と感じました。